

保育の実践と理論を求めて

—— 中国の旅 ——

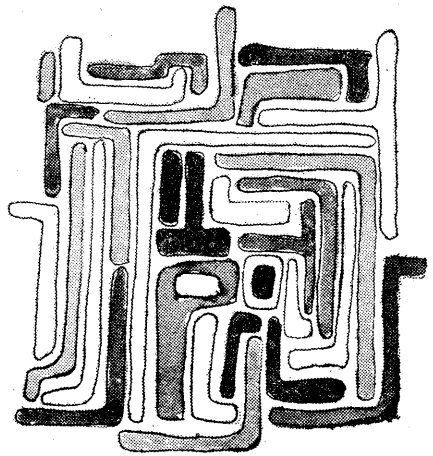
津 守 真

発達診断について

中華人民共和国、遼寧省、瀋陽市にある中国医科大学より、私は講演の招請を受けた。私の著書、乳幼児精神発達診断法（大日本図書、昭和三十六年刊行）に、小児科医が関心をもったためである。私はその後の私の著書を送り、私の学問的立場を記し、それらを含めて話すことを許されるならば承諾する旨を返答した。講演の内容は私の自由であることが更に確かめられたので、十月下旬に中国に旅行することとなった。私は、講演題を、「発

達の理解——科学的児童研究と人間学的児童研究の合点に立つ乳幼児精神発達診断法によって——」とした。

昭和三十年代に、乳幼児精神発達診断法を著したとき、私は二つのことを考えていた。その第一は、発達診断は、人為的に構成された検査場面ではなく、日常生活の中で観察されることを資料としてなされるものではないかということであった。日常の保育の中で子どもが示す行動には、子どもの発達の最も本質的なことがあらわれているはずで、そのことに気がつけば、それは保育の



実践にも役立つという考えが根底にあった。

第二には、私は、お茶の水女子大学附属幼稚園で、幼児が一日中遊ぶ姿に魅せられており、それを簡潔に、客観的に示すことができないかを考えていた。子どもが十分に自己実現したときにあらわれる行動を明瞭にしたいと思った。このことは0〜3歳の乳幼児について同様であるが、とくに、3〜7歳の続編（大日本図書、昭和四十年刊行）に私は示した。

この私の意図は、ある点で成功したが、別の点で失敗をした。保育によって子どもが十分に生きることができたとときの行動が、年齢的に、発達的に順序づけられることを示した点では成功と言ってよいだろう。また、一般に、子どもが共通にたどる発達筋道を、具体的に認識することを可能にしたと言ってよいと思う。しかし、それが保育の実践にどのように生かされるかという点になると、疑念が生じる。それが何処に由来するかというと、根本的には、子どもの行動を子どもの世界の表現と見ることせず、子どもから切り離して客観的行動の断

片とした点にある。保育においては、保育者は子どもの行動の表面を見るのではなく、その行動をしている子ども心の世界に、大人も自身の心の世界をもって応答する。あらわれた行動を生活全体から切り離して問題にしたのでは、それをどんなに科学的に精確に操作しても、保育の実践とは直接的関係はない。

更にまた、発達診断法は、年齢を規準として数量的に整理してあるので、それを個人に適用する場合、一方には、個人の発達の状態の相対的認識を可能にするが、他方には、個人を価値的に評価し、序列化する危険がある。ことに日本では、個人の能力の競争原理の教育が背景にあるので、これが個人の優劣の評価に使われる危険が生じた。これは、本来、この診断法の意図するところではない。

本来の意図とは違うことに利用されるに至るのは、科学的研究に共通の問題なのではないか。

保育や教育のように、人間が人間に直接にかかわる分野では、自然科学的な研究法や知識とは異なる考え方を必

要とする。大人が子どもの生活の外に立って、子どもを対象化して操作し、支配するのではなく、生活を共にする中で相互に理解する研究法が考えられねばならない。すなわち、人間科学的、あるいは人間的研究であり、保育においては、実践と切り離しがたく表裏をなす。保育の実践は、人類の歴史と同じだけ古くからあるのだが、その人間科学的研究は、現代にとくに必要とされている、新しい課題である。

さて、私の乳幼児精神発達診断法は、研究の手続きにおいては、科学的児童研究の方法に従っており、そこを用いられた資料は、大人が子どもの生活に参加することによって生み出された日常的行動である。欠点と危険性をはらみながら、科学的児童研究と人間学的児童研究の合点に立つものと性格づけてよいかと思う。

私共は、具体的にひとりの子どもと生活を共にするとき、他の子どもと共通の発達の道筋が、その子どもに独自の個性的な仕方で生きられていることを発見する。そこで、発達の途上にあらわれる共通の行動（行動項目）

のひとつひとつを、いろいろの子どもの具体例について考察することは、発達の理解を一層深めることになり、また、保育の実際にも役立つ知識となるであろう。いまここで、具体的行動に立ち入ることはできないが、私は以上のような考えのもとに、この講演で、発達の問題に新たに立ち向うことにした。

北京の空港で、中国医科大学の郑先生に迎えられ、中国航空に乗り換えて、瀋陽（シェンヤン）まで、約五分である。はじめて通る夜の街並みは、自転車と人間がまばらに通るだけで、静かである。中心街に近い両側の煉瓦造りのビルは、昭和の初め頃を思い出させる。昔、奉天と呼ばれた時代に建てられた遼寧賓館は、重厚な大理石の床に金色の欄干の回り階段のある古典的なホテルである。夜中に、汽車の汽笛が聞える。ホテルの前は人民広場になっており、毛沢東の巨大な銅像が立っている。

翌日から、朝八時半より夕方四時半まで、二日間にお

たつて講義をすることになった。七、八十名の小児科医が聴衆である。医師であるけれども、だれもが謙虚で、親しみ深い。中国には、心理学者が極めて少ないよう
で、基礎児科と呼ばれる小児科部門が、乳児期のみならず、幼稚園から小中高校に至る身心両面にわたる児童の諸問題を扱っているようであった。私が個人的に話した何人もの医師たちが、医学は検査と投薬で終るのではなく、人間の問題なので、自分たちは心理学に関心をもつのだと語った。

私は自分の考えを率直に述べた。発達診断が個々の子どもの序列化に誤用されるのではないかということについて、何人もの人がそのように用いられることは反対であるが、ここではそのような心配は少ないのではないかと言われた。日本のような個人の能力の競争原理の教育ではなく、平等の原理に立った教育だからという趣旨のようである。短期間の滞在であるけれども、私も、子どもがおかれている状況が日本と中国では違うのではなからうかと思うようになった。私の見るところでは、中国

の子どもたちはのびやかで明るい。空港でも街でも、子どもに対して大きな声で叱るのを聞いたことがない。西洋の空港で見ると、シーと子どもを制止する光景も見たことがない。私の案内をつとめて下さった医師たちにそのことを話すと、その人たちは同意を示した。中国には子どもは眼のひとみであるということわざがあり、大人は子どもを大切にすのだと話してくれた。

講義のあとの質問時間に、すぐに手が上らない点では、中国の人たちは西欧人よりも日本人に似ている。それでも回を重ねるにつれて、質問が紙に書かれて私の手もとにくるようになった。早教育をどう考えるかという質問がいくつもあった。中国では一人子政策がとられている。一人の子どもに対してできるだけのことをしようという考えがある。私はそれに対して、早教育には二種類あることを述べた。第一は、ある特定の能力だけに着目して訓練をする早教育であり、第二は、大人と子どもの相互性の中で生活全体を育てる意味での早教育である。前者は私は反対であるが、後者の意味での早教育は

必要である。それは早教育というよりも、むしろ保育 (care and education) であって、それは生れたときからすである。

小児科医の馬先生が、流暢な日本語で通訳して下さい、「先生はこの地に文化をもたらして下さいました」と結語を述べられたことは、私の最も嬉しいことであつた。

中国医科大学附属幼稚園

二日間の講義を終えて、三日目に附属幼稚園を訪問した。前晩に私を雑技(リーチ、曲芸や手品のショー)に案内してくれた女医さんが、幼稚園の子どもたちが私を楽しみにしていますと言っていたが、皆が私を待ち受けている様子だった。生後三ヵ月から入園することができ

る。

二、三歳の子どもの部屋には、三つの机をそれぞれ六、七人の子どもがとりかこみ、各机に異った種類のブロックが出してある。子どもたちはめいめい、自分の思

うようなものを作っている。ふと気がつくとき、ひとりの男の子は、ブロックを高くつなげて、その先端を私の方に伸ばしている。(写真1) 私に向けている関心がそのような作品になっていることが分かったので、私も坐りこ

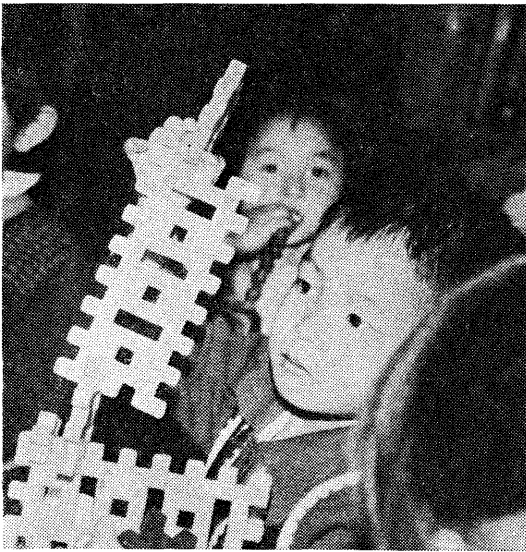


写真1

んで相手をする事になった。しばらくすると、先生が私の肩を叩いて、後の女の子が私に何か差し出していることを知らせてくれた。ふり向くと、にっこり笑ってプ



写真 2



写真 3

ロックを渡してくれた。(写真2) 皆が活潑に何かを作っている中で、私も楽しんで時を過した。
四、五歳の部屋では、病院ごっこをしている。(写真

3) 診察室、薬局、受付、レントゲン室、待合室、売店など、いくつかのコーナーが作っており、二、三人から数人ずつ子どもがいる。私はここで主賓の役を演じなけ

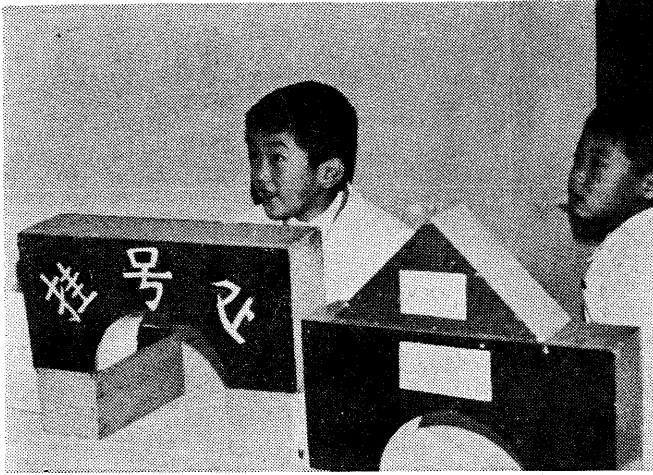


写真4

ればと思い、上衣を脱いでお医者さんの聴診器の前に坐った。すると、最初に受付(挂号处)(写真4)にいらって受診票をもらうのだという。診察を終るとレントゲン室にゆく。本物のレントゲン写真が吊り下げである。

薬局(薬局)で薬をもらう。帰りに売店で果物を買うとき、私はお金をもっていないので、クラスの先生が大急ぎで紙のお金を探して私にもってきてくれる。先生が遊んでいるのか、子どもが遊んでいるのか分らないくらいの大騒ぎである。この病院ごっこも、私を待機していはじまったらしい。特別の訪問客の日の賑やかな遊びを、私も一緒に楽しんだ。

給食調理室には、丁度、昼食のための蒸しパン、揚げドーナツ、レバー、鳥などがゆで上って準備の最中だった。若い男女の調理師が、種類ずつ全部を私に食べさせるのに子どものように大はしゃぎで、私はこの日は昼食を食べられないくらいだった。

六、七歳の部屋は、全部で六つの大きな机で、自由画、粘土、貼絵などをしていた。机ごとに材料はきまっ

ているが、何を作るかは子どもに任されている。小学校に年齢の子どもが入りきれないので、一年生は幼稚園にいるのだとことであった。机ごとに分れてそれぞれが活動しているところは、黒板に向って一斉に授業をしている日本の小学校一年生よりも、偶然の事情とはいえ、充実した活動をしているように思えた。

最後に、遊戯室で、一クラスの子どもたちが集まり、五、六人の子どもが伝統衣裳を着けて、少数民族の舞踊をしてくれた。そのときには、出入口にまで一杯、人がひしめて見物している。子どもたちは得意気に、可愛らしく動いていた。遠方からの訪問者を迎える祭りのように思えた。帰り際には、自動車のまわりを皆がとり囲んで、なかなか自動車が動けなかった。私もこの子どもたちと名残りを惜しんだ。

この特別な一日から、中国の幼稚園の一般的な性格を論じることができない。しかし、この一日からも分るのは、大人と子どもとの間に相互的な関係が密接にあるこ



写真5

とである。大人が子どもを統制してはいないし、子どもが大人に対して反逆的な様子も見られない。むしろ、一緒になって生活しているという印象を受けた。この幼稚園は、中国医科大学で働く女性の職員の子どもだけしか入れない。昼になると、小さい子どもの母親たちが、子どもと一緒に玄関の階段に腰をおろしている。三歳以上の子どもは、母親が夜勤などのとき、夜も子どもが泊ることが出来る。子どもはそのようなとき、どのような様子なのだろうかと私は疑問に思ったが、子どもたちは明るい表情であった。これも、社会全体の中での大人と子どもの生活の全体の中で考えられねばならない問題なのであろう。後に北京に滞在したとき、天壇公園のベンチに腰を下していると、夜の公園を、父親と子ども、両親と子ども、祖父と子どもが、仲良く話しながら通り過ぎてゆく。八時を過ぎた広い公園の暗い闇の中から、子どもたちのしゃく声絶え間なく聞える。そして朱塗りの回廊の欄干には、老婆が三、四人腰をかけてしゃべっている。勿論、若い男女のカップルが一番多い。シカゴ

の夜の公園で、このような光景は想像することもできない。このコントラストを、子どもの問題からも、どのように考えたらよいのだろうか。

瀋陽でも北京でも、幅広い道路を、朝夕には、自転車が数十列をなして、ゆっくりと同じペースで銀輪を光らせて進む。だれひとり、スピードで追い抜く者はいない。私は、これは交通規制によるのかと女医さんにたずねると、それは規則ではなく、全く自主的な規制だという。周囲の人と相互的な自分の行動に敏感でなければ、こういう風にはならないだろう。

私は、軍人が制服を着た時の直立不動の姿勢に象徴されるような、型にはまった集団的規律は、東洋人に共通の傾向かと思っていたが、ここでは人民解放軍の若い兵士たちは、皺の寄った制服に、軍帽をあみだにかぶって、ぶらぶらと気楽に子どもの手をひいて歩いている。日本の自衛官も、昔の兵隊と比べると随分くだけてきたが、この兵士たちのどけさとはまるで違う。日本の軍人の角張った態度や威張った口調は中国人には特別の記

憶を呼び起すらしい。北京のホテルでたまたまテレビのチャンネルをまわしたとき、日本軍が中国の農家に入って中国人に命令しているシーンを映し出していた。これは日本の軍隊の非人間的規律性を強調しているようにも思えた。医師たちは、私に遠慮して急いでチャンネルを回そうとした。この日本独特の軍隊の集団規律の精神は、いまでも、私共日本人の中に生きている。これは日本人が国際社会に交わってゆくのに、解決しなければならぬ問題であり、教育の問題である。教師が軍隊の司令官のようになるとき、教育は失われる。帰国したときは丁度運動会のシーズンで、私はこのことをとくに考えさせられた。

十月十日の夜、馬先生の自宅で、医局の方々の手製の家庭料理をご馳走になってから、夜行列車で瀋陽から北京に向った。寝台車の切符を前日に半日がかりで駅頭に並んで買われたとのことである。二人の立派な医師に案内されて、万里の長城、明十三陵、頤和園、故宮を観光

できたのは望外であった。その巨大な規模に驚くと共に、千数百年前、隋、唐の時代に、もっと奥地にある当時の都を私共の先祖達が訪れたときの驚きを想像した。戦争からひきつづいて、文化大革命の二十年間、中国は世界に対して開かれていなかったし、私共も中国を知る機会が少なかった。いま近代化の道を歩み始めた中国が、長い歴史の中で培われた東洋の知恵をもって、近代科学の長短をよく検討しつつ、人間と教育の問題と取り組まれることを切望した。

(愛育養護学校)